

第二回米朝首脳会談後の トランプ大統領記者会見に見るメディア戦略

袖川裕美

President Trump's Media Strategy As Was Seen in the Press Conference following the 2019 U.S.-North Korea Hanoi Summit

Hiromi SODEKAWA

The 2nd U.S.-North Korea Summit between U.S. President Donald Trump and North Korean leader Kim Jong Un was held in Hanoi, Vietnam on February 27 and 28, 2019, but it broken down without any agreement. The U.S. wanted North Korea to completely dismantle all nuclear facilities in their country in exchange for lifting sanctions, whereas North Korea wanted all sanctions to be lifted just for giving up some of their nuclear facilities. They could not meet half way. President Trump eventually walked out, although both sides confirmed their diplomacy would continue.

The author of this paper did simultaneous interpreting on the TV program of the conference aired by a private broadcasting station in Japan. In the press room Mr. Trump did not look as energetic and spirited as usual, but he handled the press with respect. Usually, however, President Trump continued to call the mainstream mass media “fake news!” He did not listen to any criticism about himself or his administration from, for example, CNN and New York Times. The author began reflecting on why there is such a gap between Trump's rather decent attitude in the Hanoi press conference and his hostility during other ordinary press conferences.

The author examines all 21 reporters who were allowed to ask questions of the president during the 38-minute Hanoi conference, focusing on their questions, the organizations they belong to, and some personal details. The author came to understand something about President Trump's extremely well-calculated media strategy.

序

アメリカのトランプ大統領と北朝鮮の金正恩（キム・ジョンウン）朝鮮労働党委員長による第二回米朝首脳会談が、2019年2月27日、28日にハノイで開かれた。北朝鮮の非核化¹⁾と朝鮮戦争終戦宣言・平和条約締結へ向けた合意が期待されたが、会談は思いがけず不調に終わった。アメリカ側によると、北朝鮮はニョンビョンの核関連施設の廃棄と引き換えに、すべての制裁解除を求めたが、アメリカはそれでは取引できないと交渉の席を立ったという。一方、北朝鮮側は、制裁解除は一部しか求めなかったと主張。食い違いはあるが、双方とも交渉継続の意思は示している。

民放テレビ局で記者会見の同時通訳を担当した筆者にも、当日は早くから合意不成立との情報が伝わってきた。前倒しになった会見の場にトランプ大統領が現れたのは、28日午後4時少し前（日本時間）だった。

物別れというまさかの結果に、トランプ大統領の表情は硬く、いつもの気迫は感じられなかった。それでも記者に対して不機嫌で失礼な態度を取ることもなく、第一回米朝首脳会談後（2018年6月）の記者会見と同様、なかなかの記者裁きで次々と質問に答えていった。一方、よく知られたことだが、トランプ大統領はいかなるメディアの批判も全く受け付けず、トランプ政権を批判するCNNやニューヨーク・タイムズなどのメディアを「フェイク・ニュース（偽ニュース）」と呼び、激しく対立している。

記者裁きの良さと主要メディアへの常態化する敵対的態度。このギャップに疑問を持った筆者は、本稿で、今回質問を許された記者たちの所属組織やトランプ大統領とのやりとり²⁾に焦点を当て分析を試みた。その結果、浮かび上がったのは、トランプ大統領の周到的なマスコミ対策だった。

1. 質問を認められた記者

38分間の記者会見で、21人の記者が質問をしている。順番に追ってみる。名乗らない者もいるし、名乗っていても聞き取れないものもあるが、出来る限り所属等を明らかにした。記者の質問と大統領の答えについては要約を記す。

① (04'31")³⁾ Major Elliott Garret, Chief White House Correspondent, Correspondent for CBS News, and a Correspondent at Large with National

Journal. (エリオット・ギャレット少佐。CBS ニュースのホワイトハウス担当記者。「ナショナル・ジャーナル」にも寄稿。その前はFOX News Channel のホワイトハウス担当記者だった)。CBS はリベラル派。記者：会議は想定より困難だったか。北朝鮮の制裁解除要求が交渉のネックになったのか。第3回首脳会談はあるか。制裁はこれまで通り、課すのか。

トランプ大統領：北朝鮮は、非核化をする意思はあるが、こちらの求める地域ではなかった。それだけで北の求める制裁の全面解除には応じられない (They wanted the sanctions lifted in their entirety and we couldn't do that)。だから席を立った。制裁は維持する。我々はメディアが言うように、あきらめてはいない。北は可能性に満ちている。キム氏とはいい友人になれた。

- ② (05'49) John David Roberts, Canadian-born TV journalist. FOX News Channel, Chief White House Correspondent. (ジョン・デイビッド・ロバーツ。カナダ生まれのテレビ・ジャーナリスト。フォックス・ニュース・チャンネルのホワイトハウス担当・主任記者)。その前はCBS ニュース、CNN に勤務。フォックス・ニュースは保守・共和党寄り。特にトランプ政権支持を鮮明にしている。「トランプ政権のための国家支援テレビ」(Brian Ott, 2019) とまで言われている。

記者：大統領とキム氏の考える非核化には、距離があったのか。北は核を維持するつもりだろうが、これを認めるのか。今回の会談と次の会談で、そのギャップは埋まるのか。

大統領：距離はあった。北の核保有を認めるかどうかについては、コメントしたくない。ただ、1年前に比べて距離は縮まった。いずれギャップは埋まる。

トランプ氏は、北の核保有を認めるかどうかについて、ロバーツ記者からの追及を避けるかのように、同じFOX ニュースのトランプ“親衛隊”ともいえる Sean Hannity (ショーン・ハニティ) 記者に、急に話を振り向けた。

- ③ (06'38) Sean Patrick Hannity, American talk show host and conservative

political commentator. Hannity is the host of the Sean Hannity Show, a national syndicated talk radio show. White house advisors have characterized him as the “shadow” chief-of-staff. (ショーン・パトリック・ハニティ。アメリカ・トークショー番組のホスト。保守派政治コメンテーター。「ショーン・ハニティ・ショー」(ラジオ)のホスト。ホワイトハウスの補佐官らは、ハニティ氏のことを「影の首席補佐官」と呼ぶ)。

大統領：ああ、そこに、誰も聞いたこともない紳士がいるね。ショーン・ハニティだ。そこで何しているんだ、ショーン・ハニティ？ 彼に質問させるべきか、どうだろうね。

2番目に発言したロバーツ記者もトランプ政権寄りのFOXニュースの記者であるが、ハニティ氏はその中でも熱烈な支持者で、自身を“an advocacy journalist or an opinion journalist”(主張・意見ジャーナリスト)(NY Times インタビュー2017)と言い、もはや、本来的な意味でのジャーナリストではないとの悪評もある人物である。

ロバーツ記者の質問の途中に、同じ系列とはいえ、唐突に自分にべつたりの人物に目を向けるということは、トランプ大統領がロバーツ記者に「もういいだろう」というサインを出したことになる。同じFOXニュースとはいえ、内部に確執があると言われる。いずれにしろ、ロバーツ記者には、やはり失礼になろう。

しかもトランプ氏の言及の仕方は、事情を知らなければ、話題にされたハニティ氏にとっても失礼に聞こえる言い方だった。ハノイでの首脳会談成功のあかつきには、ハニティ氏によるトランプ大統領への独占インタビューが予定されていたので、不首尾に終わった会談後の記者会見に来たハニティ氏を少々皮肉った可能性もなくはない。

また、トランプ氏とFOXニュースとの関係も、細かなレベルでは波があり、AFP(2019年8月29日)によると、トランプ氏はFOXニュースが、「誠意が足りない、自身のために働くのをやめた」と不満をあらわにしている。記者会見の時点で、そうした予兆となる出来事があったのか。あるいは、ハニティ氏は自分の大支持者なので、首脳会談の不調のストレスを八つ当たりしても構わないと思ったのか。さまざまな憶測を呼ぶ「割り込ませ」であった。

この後、再び、ロバーツ記者に戻すが、話の接ぎ穂を失った形になり、

トランプ氏は、米朝のギャップをどう埋めるかとの問いに対して、制裁を維持するが、時間をかけてギャップを埋めると言うにとどめた。

(07/28) ショーン・ハニティ氏。

記者：(発言の指名を受けて) ラジオ・テレビで仕事をしている。レーガン大統領も一旦は交渉の席を立ち(1980年代、レイキャビクで行われたソ連のゴルバチョフ共産党書記長との INF 中距離核戦略全廃条約の交渉で)、当時は非難されたが、最終的には(条約は締結され)アメリカにとっていい形で終わった。今回の決定は大統領の決定か。将来の米朝関係について、この会見を聞いているキム委員長へのメッセージは何か。

大統領：私の決定だとはいいたくない。いい関係を維持したい。人質は返ってきたし、ミサイル発射実験もない。キム氏はロケット発射実験や核実験はしないと約束した。キム氏を信頼しているので、その言葉を信じる。この後も話し合いは続ける。

ハニティ氏は今更ながら自分を名乗ることはせず、「ラジオ・テレビで仕事をしています」という、やや奇妙にも聞こえる、堅苦しい挨拶で始めた。トランプ氏による自分への言及の仕方をどう受け止めていいか、戸惑ったように見受けられた。それでも、トランプ氏を国民に人気のあるレーガン大統領にたとえ、一旦は決裂した交渉も最後はアメリカのためになったという発言は、トランプ氏を大いに持ち上げるものである。トランプ擁護者にふさわしい発言と言えよう。CNN のアコスタ記者は、[lobbed softball questions] (高くゆるい球を投げるロビーイングのような質問をした) (2019) と評している。

④ (09/15) Jonathan Karl, ABC News Chief White House Correspondent, 94th President of the White House Correspondents' Association. (ジョナサン・カール。ABC ニュースのホワイトハウス担当記者。ホワイトハウス担当記者協会の第94代会長。ABC は中道左派)。

質問：キム委員長について新たに知ったことはあるか。ワシントンで、前夜に行われたマイケル・コーエン元顧問弁護士の公聴会での発言についてどう思ったか。

大統領：コーエンの発言は正しくない。こんな重要な会談の真っ最中に、あのような fake hearing (偽の公聴会) を開くのはひどいことだ。ただ、コーエンは嘘ばかりついてしたが、ひとつだけ嘘をついていなかった、「no collusion (ロシアの共謀はなかった)」と言ったことだ。嘘をついたが、100%ではなく95%だった。だが話はすべて hoax (でっち上げ) で witch hunt (魔女狩り) だ。

ワシントンでは米朝会談と並行して公聴会が開かれ、トランプ氏の10年来の腹心だったコーエン被告が、2016年大統領選へのロシアの介入疑惑や、トランプ氏の不倫相手とされる元ポルノ女優への口止め料の支払いなどについて証言した。トランプ氏を“a liar, a conman, a racist”(うそつき、詐欺師、人種差別主義者)と酷評した。全米では、米朝首脳会議より、はるかに多くの耳目を集めた。トランプ氏自身、これを戦々恐々として見ていたと思われる。筆者は、会談前にテレビ局のスタッフから、コーエン被告の発言について多く質問が出るだろうとブリーフィングを受けていた。

だが、この質問はトランプ氏にとって予想されたことであり、用意周到に準備をしていたと思われる。コーエン被告を酷評しつつ、その言葉尻を捉えて no collusion (共謀なし) にのみ焦点を当て、巧みに追及をかわした。また、コーエン証言について質問した記者は、結果的にカール記者だけだったので、トランプ氏による記者戦略が功を奏したといえよう。

⑤ (11'34) Jane Tung (?) (ジェイン・タン、広東テレビ)。アジア系の若い女性記者。白い上着に赤のインナー。トランプ氏は、女性記者3人のうち、すでにマイクを持った人物ではなく、敢えてこの記者を指名。既知というわけでもないの、きまぐれに指名をしたように見える。

記者：交渉の席を立ったときの雰囲気はどうだったか。

大統領：関係は良好、友好的。北の問題はこれまでの政権が解決すべきだった。何もしなかった。両国の政治システムは異なるし、世代も違うが、互いに好感を抱いている。

トランプ氏は、ポンペイオ国務長官にもこれに賛同する発言をさせる。

⑥ (13'30) Jon Sopel, BBC North America Editor. (ジョン・ソペル。イギ

リス BBC の北米担当部長)。

記者：準備が十分にできていない段階での首脳会談は時期尚早ではなかったか。昨夜のホワイトハウスの予定では、今日合意すると言っていた。今後の見通しはどうか。

大統領：交渉は、つねに席を立つ覚悟が必要で、今日合意することもできたが、しない方がいいと判断した。文書も用意してあったが、署名しないほうが適切だと判断した。拙速にはしない。正しいことをする。

BBC のソベル記者とは、これまでに緊張をはらむやりとりをしたことが何度かある。2017年2月16日の記者会見では、質問とは関係のないレベルでの応酬もあった。BBC の記者であると名乗ると、トランプ氏が“Here’s another beauty.” (ここにも別の“美人”がいる)と言う。ソベル記者が、“Good line. Impartial, free and fair.” (いいセリフですね。不偏、自由、公正です)と答えると、トランプ氏は“Just like CNN” (CNNと同じだ)と皮肉った。トランプ氏は、BBC を CNN 同様に偽ニュースの代表格として批判している。それ以降も、ソベル記者とはたびたびぶつかっている。しかし、今回の記者会見では、トランプ氏は“In the back.” (その後ろ)という言い方で指名。ソベル記者は自分を認識しているという前提のもと、名乗らずに質問に入った。

こうした対立的な背景があっても、トランプ氏がこの場で質問を許したのは、BBC がイギリスのメディアであり、世界の主要メディアであるからだだろう。この日、同一視されている CNN の指名はなかった。

⑦ (14/25) 韓国の若い女性記者。名乗らず。不慣れと見え、必死に話そうとしている。

記者が、朝鮮半島の非核化推進の努力を感謝すると述べ、キム委員長と話し合った非核化に関するオプションと方法について詳しい説明を求めた。それに対し、トランプ氏は、多くの方法について話したと言ったが、非核化とは核を廃棄することだと言うにとどめ、北朝鮮は開発の可能性が高く、成功できると答えただけだった。

⑧ (15/29) David Sanger, national security correspondent, New York Times. (デイビッド・サンガー。ニューヨーク・タイムズの国家安全保障担当記

者)。NY タイムズ (リベラル左派) で36年のキャリアがある。

記者：シンガポールでの第一回米朝首脳会談以降、北朝鮮はミサイルや核物質を増大させている。これが大統領にはプレッシャーになっているのではないか。どう考えるか。

大統領：増えていると言う者も、そうでないという者もいる。ニョンビョンの非核化は可能だったが、それだけだと君たちマスコミは不十分だと言うだろう。国連やロシアや中国も含む国々、また韓国や日本などの同盟国のことも考えなくてはならない。信頼を損なうことはしたくない。

ここでは、北朝鮮の核関連施設について熟知しているアメリカが、全ての核関連施設の非核化を求めたのに対し、北朝鮮はニョンビョンの核関連施設の非核化だけで、制裁解除を求めたと言っている。ポンペイオ国務長官がトランプ氏の発言をサポート。

⑨ (18'36) 若い女性記者。名乗らず。肌の色から南アジア系か。赤い上着を着用。

質問：北朝鮮が完全で検証可能な非核化を終えたら、すべての制裁を解除するのか。

大統領：いい質問だが、交渉上、そうだとは言えない。日本、韓国、中国などの国が北朝鮮の経済支援を行うだろう。キム氏は核搭載ロケットやミサイル発射はしないと云った。

トランプ氏は2度にわたり質問をさえぎった。またこの程度の質問に対して「いい質問だ」と返すこと自身、逆に相手を軽く扱っているようにも聞こえる。

⑩ (20'00) Jessica Stone, CGTN (Global Television Network). (ジェシカ・ストーン。中国国営テレビ CCTV (中国中央電視台) のグローバル・テレビネットワークによる国際ニュースチャンネル)。若い白人女性。赤いワンピース着用。

記者：大統領は中国が北朝鮮の経済支援を行うといったが、米朝間の交渉における中国の役割は何か。

大統領：中国による北朝鮮支援はすでに大きく、中国国境から北朝鮮に

入る物資の93%が中国から来る。影響力も大きい。またロシアも支援している。

- ⑪ (21'09) Jen Chen, Shenzhen Media Group of China. (ジェン・チェン。中国四川メディア・グループ)。濃いピンクの上着を着用。この若い女性記者は手元のノートからほとんど目を離さずに質問。
質問：米朝会談で中国のことが話題になったか。近く行われる中国の習近平国家主席との首脳会談で何を達成したいか。
大統領：中国のことは話題になった。アメリカ経済は絶好調である。ミシガン州でクライスラーが45億ドルの工場を建設している。対中関係は難しい問題があるが、関税や貿易赤字の問題を是正するため、アメリカは追加関税をかけている。これまでのアメリカ大統領は無策だったが、我々は対応している。

トランプ氏は、アメリカ経済の好調ぶりと、米中貿易摩擦（2018年10月のアメリカの対中貿易赤字は554億ドル）について語り、記者の質問には直接答えていない。

- ⑫ (23'34) Chad O'Carrol, NK (North Korea) News. (チャド・オキャロル。北朝鮮ニュース)。Korea Risk Group (朝鮮リスク・グループ) の創設者でCEO。北朝鮮専門のジャーナリスト、研究者。アイルランド人。
質問：制裁により、南北協力がガラスの天井にぶつかっているが、韓国のムン・ジェイン大統領へのメッセージは何かあるか。次の米韓合同軍事演習はどうするのか。
大統領：ムン大統領のことは好きだし、韓国とはいい関係だ。世界のどこの国の指導者ともいい関係だ。南北協力はしばらく凍結されるかもしれないが、ムン大統領と日本の安倍首相には真っ先に電話する。

主要メディアの記者からの質問を概ね終えた後、9人目の質問者くらいから、トランプ氏は質問に答えるというより、自分の言いたいことをいう傾向が顕著になっていく。

- ⑬ (24'41) 若い中国人男性記者。ヤン・サンと聞こえるが名前不明。

Global Times China (グローバル・タイムズ)。

「米朝の仲介として、中国に今後何を期待するか」との質問に対して、トランプ氏は、「中国は助けになってくれたし、習主席は偉大な指導者で世界から尊敬されている」と述べた。ポンペイオ国務長官にも振って、賛同を求めたが、今後についての言及はなかった。

- ⑭ (25'33) 若い白人女性記者。名乗らず。英語が少々分かりにくい。メモを見つけて質問。

記者：次の米朝首脳会談を約束したか。北朝鮮を当面は核保有国として認めるか。韓国との共同軍事演習を再開するのか、凍結するのか。

大統領：軍事演習は一回やると1億ドルかかる。ある将軍がグアムは隣であり、グアムから爆撃機を飛ばすと言ったが、グアムは航空機で7時間もかかり、韓国までやってきて巨額の爆弾を落とすだけだ。韓国を防衛しているのだから、韓国がカネをだすべきだ。演習は戦争ゲームのようなもので、カネがかかるが面白いのだろう。不要とは言わないがカネがかかる。他の国に対しても、豊かな国を防衛してやっているのだから、払え。この2年でNATOからも1000億ドル回収した。これからも続ける。

肝心の、北朝鮮を核保有国として認めるかどうかに対する答えはなかった。

- ⑮ (27'50) アジア系の男性記者。名乗らず。英語堪能。

記者は、アメリカ人青年オットー・ワームビアさんについて尋ねた。ワームビアさんは、アメリカ人にとって北朝鮮による人権侵害の象徴である。北朝鮮を旅行中に拘束され、2017年に脳損傷を受けてこん睡状態で帰国し、数日後に亡くなった。

記者：(ワームビアさんのことを)キム氏に問いただしたか。責任を取るように求めたか。なぜ友人と呼ぶのか。

大統領：ワームビアさん一家とは親しく、ひどいことが起きてしまった。だが、そんなことをしてもキム氏の利益にはならないし、キム氏は知らなかったと思う。

トランプ氏は、あくまでもキム氏をかばい、自身が誇れる戦争捕虜(遺

骨) や人質の返還の話に焦点を移していった。

⑩ (29'54) 若いロシア人女性。ロシアの Sputnik News Agency (スプートニク通信社)。スプートニク通信社は旧ロシアの声。ロシア政府系メディア「ロシアの今日」の傘下であり、基本的にロシアの立場に立った報道をする。記者は肌の露出する肩紐のワンピースを着用。

核関連施設の査察 (inspection) について話し合ったかとの問いに対して、トランプ氏は記者の発音になまりがあるため、何度も聞き返し、ポンペイオ国務長官が助け船を出した。トランプ氏は「査察は簡単にできるし、北朝鮮全体の査察もできる。皆が知らないが我々が知っている施設もある」と述べた。

⑪ (31'16) 若い女性記者。Kann News Israel (イスラエル国営放送局のカン・ニュース)。白っぽいニット着用。スマホのメモをじっと見ながら質問。

質問：北朝鮮の次は、中東和平に取り組むのか。中東和平ではイスラエルはパレスチナに妥協を求められるか。ネタニヤフ首相は進んで妥協する気か。また、ネタニヤフ氏は汚職で起訴されることになるが、何か言いたいことはあるか。

大統領：ネタニヤフ氏は優れた首相だ。汚職については知らない。イスラエルは軍備を強化し、アメリカから装備を購入している。アメリカも毎年40億ドルの巨額支援をしている。パレスチナへの支援は2年前にやめた。中東和平はもっとも難しい deal (取引) だと言われているが、是非やりたい。

記者もトランプ氏も明らかに北朝鮮問題から逸脱している。

⑫ (33'25) 若い中国人男性。中国から来たとだけ述べ、所属や名前は告げず。緊張しているようで、あわてて早口。トランプ氏聞き返す。

米朝関係は、将来、アメリカとベトナムのような関係になれると思うかとの問いに対して、トランプ氏は、我々は良好な関係だと言った後に、日本との貿易協議を持ち出した。ベトナムと日本を聞き違えたのか、意図的に日本を話題にしたのか分からない。会見では、ここまでは日本お

よび安倍首相を評価する発言が続いていたが、ここで日本の自動車輸出、貿易赤字に触れ、一気に日本批判を展開。日本をけん制した。

- ①⑨ (34'24) 若い男性記者。Shanghai Media Group (上海メディア・グループ)。名前、聞き取れず。上海メディア・グループは、中国の放送メディア、文化、娯楽関連グループ。

記者：次の米朝会談は、すぐに開かれるのか、かなり先になるのか。

大統領：あまり時間はかからないと思う。今日、合意しようと思えばできたが、納得できないことはしたくなかったので、しなかった。

- ②⑩ (35'03) Debi Edward, ITV News. (デビィ・エドワード。ITVのニュース番組のアジア担当記者。ベテランの女性記者)。ITVはIndependent Televisionの略語で、イギリス最大かつ最古の民間放送局。

記者：今朝にいたるまで、トランプ大統領もキム委員長も合意に前向きの発言をしていたのに、いつの時点で合意できないことが明らかになったのか。

大統領：関係は友好であるし、言葉も前向きだったが、そもそも極めて難しい外交に取り組んでいる。過去の政権—特にオバマ政権—が、対応すべきだったが、何もしなかった。

- ②⑪ (36'20) 若い女性記者。Channel A (チャンネルA) 韓国メディア。白い上着。声が小さくて聞き取りにくい。

記者：北朝鮮が要求に応え、交渉のテーブルに再度就き、要求された行動を取るのがいつになるか分からないと言っているが、そうさせるために、アメリカは制裁を強化し、プレッシャーをかけるのか。

大統領：それにはコメントしたくないが、すでに多大な制裁を介している。さらなる強化は考えていない。キム委員長を知って、私の態度も変わった。韓国、日本、中国のことも考えている。中国の習近平国家主席も、隣国に核保有国は持ちたくないだろう。習氏も問題解決を望んでいる。

この発言をもって会見は終わった。トランプ氏は“fly back to a wonderful place called Washington, D.C.”(ワシントンという素晴らしいところに戻る)

と言った。ワシントンはコーエン被告の公聴会で大騒ぎになっているので、その渦中に戻ることが念頭にあり、皮肉に「素晴らしい」という形容が出たのであろう。

2. トランプ大統領のメディア対策

上述の質問に従って、記者の所属組織を以下の表に示した（数字は発言の順番）。

米 リベラル 中道左派	1 CBS	8 New York Times	4 ABC			
英 リベラル 中道左派	6 BBC	20 ITV ベ テラン記者 女				
米 保守右派	2 FOX	3 FOX				
中国	5 広東テレ ビ 若い女 白い上着、赤 いインナー	10 CGTN 若い女 赤 いワンピース	11 中国四川 メディア・グ ループ 若い女 濃い ピンクの上着	13 Global Times China 若い男	18 若い中 国人男	19 上海メ ディア・グ ループ 若い男
韓国	7 韓国 若い女	21 Channel A 韓国女 白い上着				
アジア系	9 アジア系 女 赤い上着	15 アジア 系若い男				
北朝鮮	12 北朝鮮 ニュース アイルランド 人					
ロシア	16 Sputnik Agency (国 営通信社) 若い白人の女 肩紐のワン ピース					
イスラエ ル	17 Kann News Israel 若い女 白系 ニット					
その他	14 若い白人 の女					

以上の分析から分かることは、トランプ大統領は、会見の早い段階で自身もよく知る米英の“大物”記者を指名している。政権寄りの保守派と対立するリベラル左派の両方が含まれている。政権寄りの保守派メディアでは、共和党支持・トランプ支持を鮮明にしている FOX ニュースから2人を指名。会談が不調に終わろうと批判的発言はしないことを前提に、早々に発言させたと思われる。事実、ひとりからは時期尚早の賛辞があった。また、リベラル左派メディアに対しても、真っ向から対立している CNN などは避けながら、面倒なことを聞きそうな記者はさっさと片づけておこうと思ったか、こちらも早めに指名した。

次に目を引くのが中国メディアの若い記者たちが、次々と指名を受けていることだ。少なくとも6人いた。中国メディアは官製メディアで、自由な報道ではない。それに続いて多いのが韓国やアジア系である。ロシアも国営通信の記者が質問していた。イスラエルは米朝首脳会議より中東和平に関心を示している。自由な報道を認めない、報道管制が敷かれた国、アジア系、さらに経験の浅い若手（特に女性）を重視したことは明らかである。

これについて、トランプ大統領と対立関係にある CNN の Jim Acosta (ジム・アコスタ) 記者が次のように述べている。“President Donald Trump showed remarkable deference to reporters from authoritarian governments at last week’s failed summit with North Korean leader Kim Jon Un.” (先週行われた北朝鮮のキム・ジョンウン委員長との首脳会談が不調に終わったが、ドナルド・トランプ大統領は、記者会見で独裁的な国の記者たちにひととき敬意を払った)、“the president spent a share of Thursday’s press conference calling on reporters from countries with state-run media, rather than on journalists from free-press nations.” (大統領は木曜日の記者会見では、報道の自由がある国の記者よりも、国営メディアの記者を指名し、かなりの時間を割いた)。これまでたびたび衝突してきたアコスタ記者が、この日、指名されなかったのは、トランプ氏の観点からは当然といえば当然であろう。

そもそも、ホワイトハウス担当の記者たちは、キム委員長の到着に際し、ホテルのファイリング・センターから排除された。さらに、アメリカ・メディアの4人の記者が、前夜のトランプ大統領とキム委員長のディナーから締め出されている。

加えて、記者会見の当日も、会場の収容人数が限られているとの理由で、

会見への出席は、希望申請を提出した上、抽選に当たった記者にしか認められなかった。

このようにして、ホワイトハウスは会見に参加できる記者を制限したのである。これでは“this was a big debacle for this White House press shop from start to finish.”（今回のホワイトハウスの記者会見は、最初から最後まで大失敗だった）とアコスタ記者に酷評されても致し方がないだろう。これらの対策が奏功したのか、コーエン元顧問弁護士の爆弾発言に関する質問も、たった一回しか出されなかった。

さらに、トランプ氏は、まだ経験の浅い“若手”の“女性記者”を多く指名した。男女差や見かけの年齢、さらには服装の色やスタイルを基に分析するのは“差別的”で正当とはいえないかもしれないが、答えたくないことには答えずに済むよう、トランプ氏が無難そうな記者を指名したのは明らかであろう。トランプ氏の記者裁きが上手いのも頷ける。今回の会談から、トランプ政権の用意周到なメディア戦略が垣間見えるようだ。

また、トランプ政権のメディア対策とは直接関係ないことながら、もう一点指摘しておきたいことがある。それは日本人記者が全く質問しなかったことだ。第一回米朝首脳会談後の記者会見でも日本人記者からの質問はなかった。拉致問題でさえ他の国の記者が聞いた。筆者は、第一回の記者会見も同時通訳を担当したが、何らかの理由で日本人記者が会場にいないのではないかとさえ思った。今回も、前回同様、中国や韓国の記者からは盛んに質問があったが、日本人記者からはなかった。これについては拙文「風刺画のコミュニケーションカー『エコノミスト』(The Economist)の表紙Ⅲ」でも触れたが、記者の劣化を指摘する声が出ている。それでも今回はさすがに日本人記者もまずいと思ったのか、朝日新聞の鈴木暁子記者が「反省」を書いている。“アジア系記者たちの気迫”がすごく、指名を受けるために立ち上がって出身国の名を叫んでいたというのだ。

トランプ氏は、会見中、何度も日本および安倍首相のことに触れていたのに、会見の場で日本人記者が拉致問題などの質問をできず、存在感を示せなかったのは大きなマイナスである。トランプ氏のメディア戦略に引っかかることなく、次の会見では積極的な対応を期待したい。

さらに、エネルギーを示すと思われる女性記者の服装にも一言触れたい。指名された10人の女性記者のうち3人が、赤系の上着やワンピースを着用（赤のインナーも入れれば4人）。3人が白系。もうひとり、記者会

見の場としては、やや違和感を覚える肩紐のワンピース姿だった。何色を着ようと、肌が露出していようと、とやかく言われる筋合いはないだろうが、少しでも目立って指名を獲得しようという、女性たちの強烈的な意思が感じられた。

特に「赤」の服は、ホワイトハウスの名物記者として知られたアメリカのヘレン・トーマス (Helen Thomas 1920-2013) 記者を想起させる。トーマス記者はジョン・F・ケネディ大統領から11代にわたる大統領に対し鋭い質問を突きつけてきた。ホワイトハウス会見室の最前列中央に「指定席」を与えられ、最後の締めや冒頭の質問をし、歴代の大統領から敬意を払われていた。この女性記者の定番“勝負”服が「赤」だった。

二度の米朝首脳会談は開かれたが、非核化・平和条約締結へ向けた動きは停滞したままである。トランプ氏は、同盟国の韓国を批判することはあっても、ミサイル発射で挑発し続けるキム氏のことは終始かばっている。

しばしば指摘されるように、2020年の大統領選で再選を狙うトランプ氏としては、北朝鮮の非核化で何としても成果を出したい。この後の焦点は、トランプ氏が年内に訪朝をして、米朝首脳会談を行うかどうかに移る。

参考として会談後の動きをたどっておく。

● 2019年10月に、北朝鮮が短距離ミサイルの発射実験を実施。2017年11月29日の大陸間弾道ミサイル(ICBM)発射以来、1年5カ月ぶりだった。複数の飛翔体が日本海に落下。核開発の全面中止に取り組まない限り、経済制裁の全面解除には応じないというアメリカの姿勢に、北朝鮮は苛立ちを募らせている。

アメリカのボルトン大統領補佐官(国家安全保障担当)は、これを「国連安保理決議違反だ」と強く批判した。

● 膠着状態を打開すべく、トランプ大統領が、大阪G20の開催中に、帰途の韓国訪問時に北朝鮮のキム委員長に会いたいと突然のラブコールを出す。電撃的な首脳会談が6月30日に実現。両首脳は、韓国と北朝鮮を隔てる南北軍事境界線の非武装地帯で史上初めて握手し、挨拶を交わした。融和ムードが演出される。これで第三回米朝首脳会談が行われたことになった。

トランプ氏は2～3週間以内に、米朝間で実務協議を開始すると述べたが、2019年10月現在、実現していない。

- 第一回米朝首脳会談で、米韓共同軍事演習はカネがかかるのでやらない、戦争ゲームだと発言して以来、演習は中止されていたが、2019年8月に米韓共同軍事演習が行われた。これに反発した北朝鮮は、中距離弾道ミサイルと見られる飛翔体を数回発射。アメリカを射程に入れる長距離でないことから、トランプ氏は、またもや北朝鮮は約束を守っていると擁護。キム氏から「すばらしい手紙」が来たとも言っている。
- 日本と韓国の関係が悪化するなかで、韓国は、日本から貿易優遇国を外されたことへの報復として、軍事情報に関する包括的保全協定(GSOMIA)を破棄する決定をした。アメリカがこれに口をはさみ、フランスのビアリッツで行われたG7主要7か国首脳会議の席上で、トランプ氏が韓国のムン・ジェイン大統領を批判。他の首脳を驚愕させた。
- キム氏は、トランプ氏に、第四回米朝首脳会談の開催の提案と、ピョンヤンに招待する考えをしるした書簡を8月に送ったという。トランプ大統領は年内の会談に意欲的と言われる。

注

- 1) 一口に「非核化」といっても、北朝鮮のみを指すのか、朝鮮半島全体(韓国を含む)を指すのかで、その意味する内容は大きく異なる。「北の非核化」は、北朝鮮の核関連活動を対象とし、北朝鮮の核開発の停止を意味する。一方、「朝鮮半島の非核化」は北朝鮮だけでなく、核兵器を保有する在韓米軍の朝鮮半島からの完全撤退までが含まれる。基本的にアメリカは前者を、北朝鮮は後者を意味するが、交渉の過程で何をどこまで意味するかは微妙に変化する。
- 2) ホワイトハウスのトランスクリプト。
<https://www.whitehouse.gov/briefings-statements/remarks-president-trump-press-conference-hanoi-vietnam/>
- 3) YouTube (<https://www.youtube.com/watch?v=4aQ79BJuDtc>) 数字はYouTubeのタイムを表わす。
<https://www.youtube.com/watch?v=su3mi77IZ2w> こちらのYouTubeは記者の顔も映しているので、記者のようすを知る手がかりになる。

参考文献

- https://en.m.wikipedia.org/wiki/Major_Garret
<https://www.newsweek.com/twitter-fox-news-damage-american-democracy-1443088>
Who's done more damage to America, FOX news or Twitter? Brian L. Ott
<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2019/07/fox-2.php> FOX ニュースとツイッター、危険なのはどっち? ブライアン・オット
https://en.m.wikipedia.org/wiki/Sean_Hannity
<https://www.afpbb.com/articles/-/3242079> トランプ氏、蜜月関係の FOX ニュースに不満
<https://www.vox.com/2019/2/28/18244483/trump-cohen-testimony-vietnam-news-conference-collusion> Michael Cohen testimony: trump responds during Vietnam news conference-Vox
https://en.m.wikipedia.org/wiki/Jon_Sopel
<https://www.nknews.org/author--bio/?author=chadcarrol>
[https://ja.m.wikipedia.org/wiki/スプートニク_\(通信社\)](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/スプートニク_(通信社))
https://www.huffpost.com/entry/donald-trump-hanoi-press-conference_n_5c7d0b5fe4b0614614dc9e Trump Played Favorites With State-Run Media In Hanoi, CNN's Jim Acosta Says, by Amy Russo
<https://www.nytimes.com/2019/02/27/business/media/reporters-banned-trump-hanoi.html> New York Times
<https://middleburycampus.com/16304/news/woman-in-the-red-dress-up-front-on-war-in-iraq-famed-political-reporter-helen-thomas-addresses-audience-in-south-burlington/> by Megan Michelson
袖川裕美 (2019)「通訳ブースは宝の山 第一回大統領は by the way が好き—①」日本会議通訳者協会 会員限定 WEB 雑誌
袖川裕美 (2019)「通訳ブースは宝の山 第二回大統領は by the way が好き—②」日本会議通訳者協会 会員限定 WEB 雑誌
袖川裕美(2019)「現場対応力を磨こう! 放送通訳者の生同通スキル 第1回」『通訳翻訳ジャーナル 2019 Spring』イカロス出版 pp. 92-96
袖川裕美(2019)「現場対応力を磨こう! 放送通訳者の生同通スキル 第2回」『通訳翻訳ジャーナル 2019 Autumn』イカロス出版 pp. 104-108
鈴木暁子 (2019)「覇気なきトランプ氏会見 アジア系女性記者指名したのは」朝日新聞デジタル 2019.3.2 <https://digital.asahi.com/articles/ASM313TW7M31UHB101C.html>
黒井文太郎 (2019)「北朝鮮は『秘密のウラン濃縮施設』を死守したか—米朝首脳会談「合意なし」で見えた両国の狙い—」JBpress/isMedia 2019.3.2

第二回米朝首脳会談後のトランプ大統領記者会見に見るメディア戦略

<https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/55648>

袖川裕美 (2018) 「風刺画のコミュニケーションカー『エコノミスト』 (*The Economist*) の表紙Ⅲ—米朝首脳会談後のトランプ大統領記者会見を同時通訳して—」 *MULBERRY* (愛知県立大学外国語学部英米学科論集) 第68号、pp. 1-22